バリデーションソフトを用いた学生臨地実習の取り組み

◎佐々木 克幸[1)]、横田 柚梨菜[1)]、後藤 好恵[1)]、樫尾 一志[1)]、小原 保彦[1)]、畠山 百合子[1)]、武田 卓也[1)]、藤巻 慎一[1)]
東北大学病院[1)]

【背景】

当院検査部生化学・免疫検査室では、2017 年度より学生臨地実習方法を見直し、技師全員で取り組む体制を構築した。2017 年度の実習評価を行い、講義と R-CPC に対する実習成果を確認することが出来たが、座学中心の実習であったことが課題となった。そこで、2018 年度より新規実習項目として試薬検討を取り入れることにした。

【目的】

新規実習項目とした試薬検討の取り組みについて、アンケート調査より理解度を確認し、次年度への課題を抽出することを目的とした。

【対象と方法】

対象は東北大学医学部保健学科 3 年生 36 名、実習期間は 8 日間であった。実習初日に担当技師より技師が作成した簡易資料を元に試薬検討の説明を実施、その後、簡易資料と Validation-support/Excel 解説書から検討計画を立案してもらった。２日目以降は計画に沿って測定を実施、データ集計を順次行い、最終日に報告会での発表までを実習内容とした。報告会終了後アンケート調査を実施し、理解度を評価した。

【結果】

実習前試薬検討という言葉、内容を知らない学生が 8 割以上であり、説明と解説書から実験計画を立案することが大変であったと回答する学生が多かった。しかし、実習後は殆どの学生が検討項目内容を理解していることがわかった。また、内容を理解した時期は、データ入力やスライド作成の段階であった学生が約 8 割であった。

【まとめ】

実習内容を変更し、2018 年度より試薬検討を追加したため、臨地実習内容がかなり密になってしまった。経験できたことや発表を経験したことが勉強になったという回答が多く寄せらせた一方で、内容を十分に理解するために時間的余裕が欲しいとの意見が数件あった。スケジュールの再検討と共に、理解度を高める指導法を検討していく必要があると考えられた。

連絡先：022-717-7380（内線）